
真純くんの事情

内海 さくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真純くんの事情

【Zコード】

Z0156Z

【作者名】

内海 さくら

【あらすじ】

結婚を意識しながらも別れてしまった元恋人が住む街に、買収の仕事をするために戻ってきた真純。彼女の婚約を知り愕然とする中、買収相手である『はなみ花屋』の店主にある想いが芽生え始める。

『私の彼は副社長』真純サイドの物語、そして、現在連載中の『*season*』の伏線となります。初めてのお客様は、『私の彼は副社長』からお読みになられることをお薦めします。

『その駅前商店街の土地を買収してくれ。
資料は届いているだろ?』

突然の電話で新たな土地買収を告げてきたF.I.E.社長、おんだけいじん恩田真人。
彼の話を聞きながら、ノートパソコンに送られてきたファイルに目
を通した僕は
驚きの声を上げた。

「父さん、寂れた商店街の土地を
こんな高い値段で買収しろと言つんですか?」

『父さんじゃない、社長だ。高いが、いつものことだろ?』

「あ、はい社長。にしても……」

どの店も多額の借金ばかり、
この資料から見ると、

この商店街の真北にある駅北口エリアの方が大型商業施設もあり集客も見込めるのに。

携帯電話を耳に挟み、不満げな表情でページを進めていると、父の呟くような声が聞こえてきた。

『実はな、真純。もう買収を始めてるんだ』

「は？」

その地域は、元々父の買収担当。

身体が弱い妻と娘に寂しい思いをさせるわけにはいかないと、自宅近くの会社を拠点にあちこちと動いているのだ。

「だったら、最後まで社長がしてください」

『いや、それがなあ……真純。口スにいい土地を見つけたんだよ』

よつやく、父の魂胆が分かつた。

父はどちらかというと、地味に仕事をするのが嫌いな人だ。テレビや雑誌に出て知名度を上げたり、

派手で豪華なスポーツクラブをデザインすることを好んだ。

そして今度は、海外進出というわけだ。

「やつこつことですか」

『さういう訳だ、副社長。……とにかく、影の社長と言つたまづがいいかもな。真純』

「本当だよ

思わず、本音が出ていた。
買収の業務の合間、普段は社長がするような業務も全てこなしている。

そのお陰で、食事や休憩時間なども取れず、移動時間にさっと済ませているのだ。

そんな多忙なスケジュールのせいで、プライベートは散々なわけだ。

「年をとつても僕が結婚できなかつたら、父さんのせいだから」

『あれ、こないだまで付き合つていた彼女はどうした?』

「とつての間に別れたよ

「へえ、結婚まで決めてたのに

ふと、亜紀の顔が浮かんだ。

平井亜紀

結婚まで考えた元恋人。

亜紀とは大学時代、友人が企画したコンパで出会った。

大学のパンフにモデルとして起用されたこともあるひとつ年上の彼女は、

美貌頭脳ともに学内一で、彼女に一目置いていた僕はコンパを企画した友人の手を取り、飛び上がるほどに喜んだ。もちろんコンパでは、彼女をターゲットに絞った。さり気なくプラチナ席である彼女のサイドをとり、談笑しながら彼女の好きな話題を探る。

ブランド品が好きで、年に一度はヨーロッパへ旅に出るという彼女の話から、僕の知っている限りのところで言葉を合わせてゆくと、尊敬の眼差しで見つめられた。

その場は、周りの男たちが羨むような好感触な雰囲気だった。ふたりの世界に入り込めないために向けられる痛いくらいの羨む視線を浴びながら、優越感に浸り続けた。

もちろん僕自身も、高嶺の花の彼女にあと数センチ……そういう意識だった。

2次会に行き、ふたりきりになつた時を見計らい彼女の携帯へ僕のメールアドを登録することに成功する。だが……。

「あなた、素敵だけど女性の扱いが上手すぎて怖いわ。付き合つたら女性関係で苦労しそうね」

なんて、まるで占い師のような言葉を投げかけられおまけに、このメールアドは破棄していい?とまで言われたのだ。

もちろん力チンと来た。

思わせぶりな雰囲気を作り上げ男をその気にさせながら、いきなりどん底に落とす。

付き合つても無いのに、未来の人生を決めつけようとする彼女、そんな尖つた鼻をへし折りたくなつた。

悪く言えばゲーム感覚にも似た気持ちだつた。

「くえ。じゃ、その言葉が本当かどうか試してみないか。火傷しないくらいに付き合つてみればいいんじゃないの？」

「試す？」

「そう…例えば、気に入った服が見つかった時、君はどうする？欲しいなら手にとつた後、鏡を覗いて自分に合つかどうか品定めするだらう？」

「あなたを品定めしていいってこと？」

「ああ、だらうぞ」

お客に物を売る時、まずは手に取らせ触れさせることが第一段階だ。

品物そのものに興味を持つてもらう必要がある。

亞紀は、意外な提案に黒い瞳を大きく開け驚いているようだ。

「ずいぶん、自分に自信があるようね。そんなこと初めて言われたわ」

「そう?自分にというよりも君を大切にする自信があるだけだ」

「わうこうこうううが、怪しいのよ。女性慣れしてるみたいで」

「失礼だな。詐欺師みたいじゃないか……まつ、いいぞ。

また会つてみたくなつたらメールして、待ってるから」

彼女の中に自分の存在を植えつけたら、即引かなければならぬ。
そこで押し過ぎたら、悪徳の訪問販売と同じになり印象は悪くなる。

暫しは焦る気持ちを抑えて彼女の連絡を待つのだ。
今後の展開が追い風となることを僕は神に祈つた。

あんなに頑張ったコンパ、結局は自惚れた自分に気付かせてもらつた形になつた。

何ヶ月も来ないメールに、彼女とのラブゲームの終息を感じ、諦める。

その後も彼女は僕にとつて憧れの人に留まり、

そうしながらも気になつた女性と出会いと別れを経験した。
だが、彼女とは意外な所から進展することになつた。

彼女が、ダイエットのためと僕の父が経営するスポーツクラブへ現

れたのだ。

当時バイトでインストラクターの仕事をしていた僕は専属の「コーチとして、

彼女につくこととなつた。

「平井…どうしてここへ？」

亜紀から渡された個人カルテに目を通して、
声が漏れそうなくらいに驚いた僕は彼女を見つめる。

ダイエットとは程遠い完璧な身体計測の値。

そして、彼女自身が僕を指名したのだと記載してあつたのだ。

その理由は、僕が問う前に彼女の口から知らされることとなつた。

「あれからも、あなたが気になつて気になつて仕方が無かつたの」

その日の夜、いまでもなく僕は彼女を食事に誘つた。

懐かしい……。

彼女とは、一番長く付き合つたと思つ。あの、男に対し尖つた性格も、彼女の過去のトラウマが原因だったようだ、

付き合い始めてからは彼女の「ひねりぱり」とした明るなや時折見せる猫のような甘えた仕草に嵌つていつた。

大学を卒業後FIEの副社長に就任したあとも、恋人関係は続いた。一足早く世間に出ていた彼女とスケジュールを合わせ、少ない時間を密に過ごし、愛を深めてゆく。しかし、その愛に揺らぎが出てきたのはお互に結婚を意識し始めた頃だった。

僕の仕事は、ますます責任の多いものとなつてゆき、なかなか彼女の元へ帰る事が出来ず、

すれ違ひの生活から互いが互いの不安を言えないまま、結局は罵りあいの喧嘩となり……。

なのに……。

別れて1年も経たないうちに、
彼女のいるあの街へ帰ることになるなんて、皮肉なものだった。

『真純？…おい！』

どれだけ僕は、ぼんやりしていたのだろうか？
久し振りに感傷に浸っていた気がする。

「もう、いいよ

父にそう告げて、心に施錠した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0156z/>

真純くんの事情

2011年11月30日21時47分発行